

令和元年6月14日現在

機関番号：32103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K11509

研究課題名(和文) エンドオブライフケア教育効果を高めるシミュレーション看護教育プログラムの検証

研究課題名(英文) Verification of Simulation Nursing Education Program to Enhance End-of-life Care Education Effect

研究代表者

黒田 暢子 (KURODA, Masami)

常磐大学・看護学部・准教授

研究者番号：90506776

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：看護系大学卒業時までには学習する機会が少ない「エンドオブライフ(End-of-Life)」ケアに注目し、シミュレータを用いた教育プログラムの開発とその継続的效果について検証を行った。教育プログラムの開発は、「臨死期」のケア場面を選択し、ARCSモデルを用いた。その後、教育プログラムの継続的な効果評価は、看護系大学生を対象に継続的(全3回)にシミュレーションの実施と実施前後の質問紙調査により行った。その結果、「情意的領域」「精神運動的領域」に関する項目で、客観的变化がみられ、シナリオを通して得られた学習者の「気づき」を客観的に評価できる可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で得られた結果は、看護基礎教育において実践的な教授することが難しいエンドオブライフケアについて、フルスケールシミュレータを用いたシミュレーションをどのように行うことが可能であるか示す実践例となった。また、シミュレーションの教育効果について、「教育において達成されるべき目標(B.S.Bloom)」の3側面「認知的領域」「情意的領域」「精神運動的領域」を踏まえて、客観的指標を用いた評価ができる可能性効果が示唆された。

研究成果の概要(英文)：We focused on “End-of-Life” care, which provides a few opportunities to learn until graduation from nursing college, and verified the development and continuous effects of a program that provided education using a simulator. The development of the educational program involved the situation of care during “the terminal phase” and the ARCS model. After that, continuous evaluation of the effects of the educational program was conducted (3 times in total) for nursing college students by conducting simulations and questionnaire surveys before and after the program. Results revealed that, in terms of the “affected area” and “psycho-motor area,” objective changes were observed, and it was suggested that the learners’ “awareness” obtained through the scenario could be objectively evaluated.

研究分野：シミュレーション看護教育

キーワード：エンドオブライフケア教育 ARCSモデル 授業設計 シミュレーション看護教育プログラム

1. 研究開始当初の背景

1) 看護基礎教育における学習環境の変化とシミュレータ導入の背景

近年、看護師の卒後教育では、基本的な知識や技術の習得に加え、応用力、問題解決能力、実践力を身に付けた人間性豊かな人材育成が求められてきている。

卒後教育では、シミュレーションは実践能力を身につけるために効果的であるとされ、新人看護師教育を始めとしてシミュレーションを用いた院内教育研修が盛んに行われている¹⁾²⁾³⁾。一方で、看護基礎教育では、看護学生が、実践的能力をはぐくむのに効果的な学習方法である実習の看護師教育課程における総教育時間数について、昭和26年の制定時に比べると、佐々木⁴⁾は、学内における看護に関する理論教育が増加する一方で臨地実習時間は著しく減少していると述べている。

また、患者の「病院」の平均在院日数が、患者調査⁵⁾によると、平成11年に41.8日だったのが、平成23年には34.3日と短縮化(全患者数比較)しており、看護学生が病院で学べる機会が激減し、看護実践能力を実習病院で習得することの限界を示唆している。

厚生労働省⁶⁾は「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」の中で、看護師に求められる実践能力を育成するための教育方法として、学内でシミュレーション等行うなど臨地実習に向けて準備しておくことにより、効果的に技術を習得することが可能となると述べ、講義・演習・実習教育の効果的な組み合わせとして、シミュレーション教育を積極的に取れ入れることを推奨するようになった。

アメリカの看護基礎教育では日本の看護教育事情と同様の状況であるため、すでに積極的にシミュレーション教育を実施し、その成果を上げている。Elizabeth A. H, and Helene C⁷⁾は、その中でも特に「高度再現度シミュレータ(高性能人体モデル人形)(以下、高性能シミュレータ)」を導入したシミュレーション教育を行い、臨床判断能力や、意思決定能力の向上に有用であることを報告している。

2) 看護基礎教育におけるシミュレーション教育の効果検証の必要性

日本の看護系大学においても高性能シミュレータが、学習教材として導入されつつある。織井⁸⁾は、シミュレーション教育に用いるシミュレータは、実際の患者症例を設定でき、看護者の対応によってさまざまに患者の状態が変化するような状況設定が可能な、高性能シミュレータが適していると述べ、臨床実践能力を育成するためのツールとして期待されている。しかし、その効果について明らかにしている研究⁹⁾¹⁰⁾は少なく、どのように演習の中に組み込んでいけばよいか、看護基礎教育において課題となっていることが予想された。

シミュレーション教育の効果について、学生の看護技術修得度の自己評価を用いて調査を行ったところ¹¹⁾、身体侵襲度が高い治療や診察技術など、演習及び実習を通して経験が少ないまたは経験できない看護技術修得度の得点が低く、経験することなく卒業している看護技術があることが明らかとなった。しかし、「注射など人へ実際に行ったことがないため就職するのに不安がある。」といった学生から意見があり¹²⁾、現状のままでは、基礎教育と現場のギャップが大きく、看護師として就職後にリアリティショックが起こりやすい状況に陥りやすいのではないかと考えられた。

よって、臨地実習では実践できない場面を忠実に再現し、類似した環境下での経験学習が促進される¹³⁾シミュレーション教育をもっと活用していくことが重要になってくるのではないかと考えられた。

3) エンドオブライフ(End-of-Life)ケア教育におけるシミュレーションの必要性

新人看護師の経験しているリアリティショックについて先行研究を概観していくと、佐居ら¹⁴⁾は、要因のひとつとして「患者の死への対応」を述べている。看護基礎教育の中で、「エンドオブライフケア」あるいは「終末期看護論」等授業科目が設置され講義や演習が行われているが、臨床場面で、「患者の死」に直面した際、対応できるだけの十分な教育内容となっているのか疑問が残る。

佐居ら¹⁵⁾は、「患者の死への対応」についての新人看護師の意見として、「生と死のケアの気持ちの切り替えが難しい」「(一部抜粋)悲しみの受け止め方を覚えなくてはと思いながらも、自分と向き合う時間がもてない」といった、心理的影響があることを述べている。つまり、「臨死期のケア」に関する知識や技術を修得するだけでなく、学生自身の死に対する態度、つまり死生観についても学ぶ機会が必要ではないかと考えられた。

よって、現状の「エンドオブライフケア」あるいは「終末期看護論」等授業科目の学習内容を改めて見直し、学習者の「教育において達成されるべき目標(B.S.Bloom)」の3側面「認知的領域」「情意的領域」「精神運動的領域」を踏まえて、検討していく必要があるのではないかと考えられた。

そして学習を深めていく過程では、患者の臨死期の場面を経験することが必要だが、実習で経験をする機会は限られているため、実践できない場面を忠実に再現できるフルスケールシミュレータを用いて、演習を行うことに効果があるのではないかと考えられた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、看護系大学卒業時の到達度としての経験が少ないまたは経験がない、かつ就職後にリアリティショックなど大きな影響を受ける要因とされている「エンドオブライフ

(End-of-Life)」ケアに注目し、シミュレータを用いた臨場感ある場面を再現して教育を行い、その継続的効果について検証を行うことである。

3. 研究の方法

- 1) インストラクショナルシステムデザインを用いたエンドオブライフケアに関する「シミュレーション教育プログラム」の作成
- 2) 作成した「シミュレーション看護教育プログラム」の継続的な教育効果についての検証
調査対象者
臨床実習を終えた看護系大学生（指定規則別表3における専門分野 および の実習を終了）
調査方法
作成した「シミュレーション看護教育プログラム」を実施し、シミュレーションの実施前後に質問紙調査を行った。
調査期間
継続的な効果評価を測定するため、初回、5か月後、11か月後（入職5か月後）に行った。
調査内容
(1) 基本属性
自身の看取り経験、エンドオブライフケアに関連科目の履修状況など
(2) 「教育において達成されるべき目標(B.S.Bloom)」の3側面（認知的領域、情意的領域、精神・運動領域）を評価できると想定した質問項目
臨末期ケアに関する知識、自己効力感、ターミナルケアに対する態度(FATCOD-J)、学習目標の到達度など

4. 研究成果

- 1) インストラクショナルシステムデザインを用いたエンドオブライフケアに関する「シミュレーション教育プログラム」の作成
ARCSモデルに基づいて、「臨末期のケア」に関する授業設計を行い、体験中心学習の演習の中で、患者役をフルスケールシミュレータに設定した「エンドオブライフケア教育プログラム」の作成を行った。シナリオは、Simulation in Nursing Education Sim Man Scenarios(NLN社)のフォーマットを参考にした。
作成したシミュレーション看護教育プログラムが実施可能であるか、中忠実度フルスケールシミュレータを用いてテストランを行い、内容や時間配分等確認を行った。
より臨床場面に近い内容になるよう、エンドオブライフケアに多数関わった経験のある看護職者にシナリオについて意見を求め、完成させた。
- 2) 作成した「シミュレーション看護教育プログラム」の継続的な教育効果についての検証
調査対象者
同意が得られた看護系大学生11名を対象とし、初回、5か月後に同シミュレーション看護教育プログラムの実施、および前後の質問紙調査を行った。11か月後（入職5か月後）については、協力が得られた5名を対象とし、同手順で調査を行った。
対象者の背景としては、エンドオブライフケアに関して全員が履修済みであったが、実習中の看取り経験は1/3、近親者の看取り経験がある者はほとんどいなかった。
「シミュレーション看護教育プログラム」実施による効果
(1) 認知的領域
臨末期ケアに関する知識（身体的変化の特徴や臨末期のケアのポイントなど）に関しては、各回ともシミュレーション実施前後の正答数に大きな変化はみられなかったが、作成したプログラムの中で家族への関わりを行ったことにより、臨末期の患者家族や近親者へのケアのポイントについて、シミュレーション実施前後、あるいは回を重ねることで、正答数が増えた。
(2) 情意的領域
自己効力感は、各回ともシミュレーション実施前後での有意な得点の変化はみられなかった。一方、ターミナルケアに対する態度(FATCOD-J)については、シミュレーションの回を追うごとに、「第1因子：死にゆく患者へのケアの前向きさ」の得点において有意差がみられた。
(3) 精神・運動領域
学習目標到達度は、患者への対応（呼名反応の確認ができた）に加え、家族への関わり（家族への具体的な提案）に関して回を重ねることで、有意な得点の変化がみられた。
また、研究協力者からの反応は、初回・5か月後（看護系大学生4年次）では、自身の知識・技術の振り返りの機会として同じシナリオでシミュレーションを行うことは有用であるといった回答が多かった。11か月後（入職5か月後）では、臨床現場での経験の有無がシミュレーションの到達目標に影響しているが、繰り返しシミュレーションを行うことは、自身の看護実践能力を評価できたり、新たな気づきにつながるといった回答が得られた。

以上の研究成果に関して、現在、論文投稿準備中である。

<引用文献>

- 1) 豊増 佳子. (2012). 自らの実践の追経験と協調的リフレクションによる新人看護師研修の提案と評価 看護における割り込み業務対処に焦点を当てて. 日本看護学教育学会誌, 22(1), 69-82, 2012.
- 2) 會田 直子, 佐々木 麻紀, 須藤 悠輔, 大西 まゆみ, 遠藤 敏子. (2011). 呼吸に関する臨床実践能力向上のための教育プログラムの効果 新人看護職員の臨床研修制度の導入に向けて. 東邦看護学会誌, 8, 22-26.
- 3) 西本 なをみ, 村井 律子. (2008). 新人看護師における多重課題シミュレーションを導入した研修の有効性 BLS 発動時の判断能力向上への取り組み. 日本循環器看護学会誌, 4(1), 54-59.
- 4) 佐々木秀美.(2006). 戦後教育時間数の変化とその影響に関する検討 看護教育課程改革がもたらしたもの . 看護学統合研究, 8(1), 1-9.
- 5) 厚生労働省. (2011a). 平成 23 年患者調査.
- 6) 厚生労働省. (2011b). 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書.
URL:<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001310q-att/2r9852000001314m.pdf>
(accessed 1November2015).
- 7) Elizabeth A. H, Helene C.(2005). Using Clinical Simulation to Teach Patient Safety in an Acute/Critical Care Nursing Course. Nurse educator,30(4),172-177.
- 8) 織井優貴子.(2008). 第 8 回 2008 International Meeting on Simulation in Healthcare リポート. インターナショナルナーシングレビュー. 31(4), 48-51.
- 9) 神田 知咲, 小西 美和子, 藤本 由美子. (2013). 看護基礎教育初年次におけるフルスケールシミュレーション学習の検討. 近大姫路大学看護学部紀要, 5, 49-55.
- 10) 小西 美和子, 永島 美香, 藤原 史博, 堀 理江, 岡谷 恵子, 増野 園恵.(2013). 看護基礎教育における卒業前学生を対象としたフルスケールシミュレーション学習プログラムの開発. 近大姫路大学看護学部紀要, 5, 49-55.
- 11) 黒田 暢子,市村 久美子, 高橋 由紀. (2015). 看護技術の修得状況とシミュレーションとの関連～第 1 報 卒業時の学生に焦点をあてて～. 茨城県立医療大学紀要, 2015;20:37-50.
- 12) 前掲 11)
- 13) 前掲 10)
- 14) 佐居由美, 松谷美和子, 平林優子, 松崎直子, 村上好恵, 桃井雅子, 高屋尚子, 飯田正子, 寺田麻子, 西野理英, 佐藤エキ子, 井部俊子.(2007). 新卒看護師のリアリティショックの構造と教育プログラムのあり方. 聖路加看護学会誌, 11(1), 100-108.
- 15) 前掲 14)

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等：なし

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：織井優貴子

ローマ字氏名：ORII Yukiko

所属研究機関名：首都大学東京

部局名：人間健康科学研究科

職名：教授

研究者番号(8桁): 50285681

(2)研究協力者

研究協力者氏名：鈴木克明

ローマ字氏名：SUZUKI Katsuaki

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。